サセックス・ダウンズメン協会（The Society of Sussex Downsmen）の活動：1939-1941

坂梨 健史郎

はじめに

イングランド南部に位置するサウス・ダウンズ（the South Downs）は、東はイースト・サセックス州から西はハンプシャー州にまで続く長大な丘陵地帯であり、それはロンドンを含むイングランド南部の多くの人々に今日まで愛されてきた。それは牧草地として機能しただけでなく、人々に散策と眺望の場を与え、その景観はイングランド南部の、時にはイングランド全体の自然のシンボル的存在となってきた[1]。

そのサウス・ダウンズのサセックス州内での景観保全やそのほか通行権等の保護を主な活動目的とする団体がサセックス・ダウンズメン協会（The Society of Sussex Downsmen、以下「SSD」とする）である。この非営利組織は1924年、サセックス在住の文人アーサー・ベケットArthur Beckettを会長として、サセックス州およびロンドン在住の名士によって結成された。この非営利組織は今日でも活発な活動を続けているが、本稿は1939年から1941年にかけての活動状況について概観するものである[2]。

1939年の第二次世界大戦の勃発は、SSDの活動にも深刻な影響を及ぼした。12月2日の評議会の席上、ベイトリー大佐は発言し、自分は去る7月25日にイースト・サセックス州評議会の事務局に出向き、カミンズと会談し、その際ブライトンの都市計画について改めて協会から強い不満の意を伝え、この件は9月まで延期されたが、戦争の勃発により、その後の動きはなかったと述べ、また11月初めに彼はイースト・サセックス州評議会の事務局を再訪し、都市計画責任者のハンフリー氏と面談してこの件について話し合い、またディッチリングの建設計画についても討論したと述べた。

またハイダウン・ヒルの監視について名誉書記から報告があった。前回の評議会の後に同書記がウォルター夫人に書簡を送り、ハイダウン・ヒルの終日監視に割くことができる地区責任者はいないと伝えた。ワージングのボーイ・スカウトがワージング当局に対して協力を申し出ていることが

後日報道された。

ダウンランドのパトロールについて、数通の覚え書きが地元報道機関に対して提供され、『ブライトン・ヘラルド』紙上での発表があったことが名誉書記から報告された。議長が5月25日夕刻の地域番組における彼の放送の詳細について報告している。

また議長から、5月28日の聖霊降臨祭に行われたダウンズの日帰りツアーに、『ニューズ・クロニクル』紙のカメラマンがダウンランド・パトロールのメンバーたちに同行したことも報告があり、当該記事が閲覧に供された。また、ダウンズで自家用車が猟犬を追いかけるのを防止するためにダウンランド・パトロールの助力を乞う旨のサウスダウンのフォックス・ハウンド・マスターからの書簡が同パトロールに依嘱された。

1939年12月2日の評議会では以下の戦時関係の書簡が名誉書記により要約されている。

・土地耕作命令
・陸軍によるオートバイ試験使用
・ダウンランド・パトロールへのガソリン配給
・コモンズおよびフットパスに関する戦時取り決め
・サセックス地域評議会による戦時計画に則った社会サービス

名誉書記がこの一年で評議会が3回、緊急協議が2回開かれたと指摘した。戦争により9月の分はやむを得ず中止となったが、状況が切迫しているため、会議を招集する時間が絶対的に欠けていると議長が指摘した。

また名誉書記から、この一年で69件の退会を受理し、そのうち30件が戦争開始後であるとの報告があった。

フットパスの整備に失業者を活用するべきとの提案を名誉書記がコモンズ・アンド・フットパス協会に対して行い、1940年3月9日の評議会で、名誉書記がその後の書簡のやりとりを報告した。良い提案ではあるが、失業者には賃金を支払う必要があると言う点で若干の問題があり、地元当局にはそれを行う権限がないとの観測であった。アーサー・ベケット会長が発言し、かつての「境界検分beating the bounds（教区境界を巡回して特定地点に杭打ちをすることで境界を画定）」の習慣を復活させるのは良い考えであると述べ、名誉書記がハンフリー・ベイカー氏に再度書簡を送り、その返答を地区責任者全員に通知した上で、必要に応じて小委員会を設けることを検討することを提案した。しかし時局柄、この考えは助力が得ら

れにくいと判断されたため、当分の間保留とすることが1940年5月25日の評議会で決定された。

また1940年5月25日の評議会では、サセックス地域共同体評議会からの書簡への返信について審議がなされた。その書簡は「失われゆく英国」を記録しようというある計画に関する物で、SSD評議会の総意は、当協会ができる助力は限られている、この件はサセックス考古学協会の方がよりふさわしい、いずれにせよこの目的に関してはすでに夥しい数の写真が存在しているというものであった。

ディッチリングで現実味を帯びてきた建設計画に対処するためディッチリング教区評議会が特別委員会を設置する予定で、SSDも代表を選出して参加するように教区委員会が要請してきたことが報告された。ギブソンが参加することを快諾している。

2月14日にロンドンでデリマンとベイトリー大佐がサー・ローレンス・チャブとビーミッシュ海軍大将との間で持った会合についてデリマンが報告した。ウッディングディーンの埋葬地に通じる新しい道路（費用は2200ポンドの予定）の建設を差し止めるため、非公式にさらなる陳情を省に対して行うのが目的であった。同計画は昨年12月に残念ながら議会を通過してしまったが、チャブもビーミッシュもウッディングディーンの主張には大変同情的で、少なくとも計画の延期を求めることに全力を尽くすことに同意し、あわせてビーミッシュはこの件でウォルター・エリオット氏に接触することを約束したとのことであった。

1940年4月27日の年次総会において会長が演説し、協会の任務を継続するという評議会の決意を表明した。彼は演説の中で、戦争は必ずしも我々に与しないであろうが、ダウンズはいつも我々と共にあると述べ、破壊に抗して戦い、いかなる緊急事態にも備えるために、協会の存続が最重要であると述べた。また、もし先の戦争の終結時に本協会が存在していたならば、我らの美しい田園地帯はあそこまで破壊を受けなかったであろう。現在の戦争は残念ながら協会に多くの退会届をもたらしたが、いくつかは一時的な物にすぎないと望まれると述べた。

会長はまた同演説で、アバゲニー侯爵の地所であるディッチリングのロッジ・ヒルが競売に掛けられた際、協会は購入を画策したが、協会の財政がごくごく限られていたために地所は残念ながら最高値を付けた者に手に渡り、後に同者がある開発会社の代理で動いていたことが判明したと報告

した。

フットパスの登録状況に関して、欠席のG・ワイルドの代理でスコット・メイソンが質問した。地区担当者およびダウンランド・パトロールに代わってベイトリー大佐が回答し、この仕事は戦争終結時にもっとも有用な記録となるべく進行中であると述べた。彼はワイルドに特別な感謝の念を表し、同氏のフットパスの一覧は現時点でもっとも網羅的であると述べた。

スコット・メイソンは続けて、現在軍事的目的で使用されている部分のダウンズについて、考古学的意義が知られている場所に対して何らかの潜在的危険が差し迫った場合に軍事当局と折衝できるようにするため、会員にその部分の一般的な注視を依頼することが可能か否かを尋ねた。彼の経験では、破壊の多くはしばしば単なる無知により生じ、必要な地元の知識を持つ者がいさえすれば当局はほとんどの場合喜んで協力し、危険は避けられ得ると述べた。必要に応じて対応を取ることが同意された。

ブライトン都市計画委員会よりの書簡が紹介され、同委員会は来る8月31日より当分の間自由参加で(on a voluntary basis)存続すると言う内容であった。

ベイトリー大佐は先週イースト・サセックス州警察本部長とその部下との間で持たれた会談について内密に評議会に報告した。彼は警察本部長とその部下によってなされた様々な質問への回答という形で数多くの貴重な助言を与えることができ、そのすべてが慎重に留意され、その一部は即時実行されたと述べた。またダウンランド・パトロールがこれまでと同様に、かつ国防市民軍とは別個の組織として存続することを警察本部長が切望し、ベイトリー大佐はダウンランド・パトロールの武装に関連して必要な手続きを踏む権限を与えられたと述べた。

また名誉会計人から、コモンズ・アンド・フットパス保存協会と歩行者協会の会員の地位は維持するも、ナショナル・トラストとイングランド田園保全評議会への会費の支払いは当分の間中止することが提案された。

1941年1月12日の評議会では、ブライトンのラークフィールドの建物開発やディッチリングの建物開発に関して、現今の情勢では何も進展がないとの報告書をデリマンが提出した。ディッチリングの建設計画に関してはギブソンも報告書を提出していたが、ここでも戦争中は何の進展もないことが予想された。この二件とトゥルーリー・ヒル・フットパスの件、および「教区画定」作業の提案については戦後案件となった。

南部地域の電化計画がポーツマスまで延長されることが様々な会員によってSSDの知るところとなった。アンバーリーのペッパー氏はかねてより電話にて議長と連絡を取り合っており、アンバーリーのダウンズの北側で鉄塔が複数建設中で、かつアンバーリーの急流域を越えんとしていることを彼に知らせた。政府向けに進行中のこの事業は機密扱いであるとする中央電力委員会からは詳細が入手できないため、名誉書記がビーミッシュ海軍大将に書簡を送り、鉄塔が戦時中一時的な地点に設置されているだけで、戦後に埋設されるか移転される可能性について、彼に影響力を駆使して貰うよう依頼することが同意された。

1940年以降、来るべきドイツ軍の侵攻に備えて、イングランド南部では様々な対策が取られたが、その一つが道標の撤去だった[3]。州道から撤去された道標について、その多くが古いもので州道の利用者にはよく知られているとして、その安全な保管に関して情報を求める書簡がSSDからイースト・サセックス州およびウェスト・サセックス州評議会の両書記に送付された。この書簡については着信は確認されたものの、いかなる情報も受信されていないとのことであった。

耕されたり軍によって閉鎖されたりした小道について、ウィーラー博士が自分の地区のそれを示す一覧を作成しSSDに送付した。その多くをウィーラー博士は最近実地に歩いている。一覧の編纂は大いに賞賛されるべきで、我々の戦後の仕事にとってきわめて有用であろうと書記は記している。

戦時中においては女性が働き手として貴重であったが、その影響はSSDの事務作業にも現れた。名誉書記の報告によれば、現行の状況により、ボンタ嬢は別の仕事にもついたが、時間があればSSDの会議に出席して書記を務めることを申し出ている。またサウス・ダウンズ・トラストの名誉書記も続けている。ベイトリー大佐は感謝の決議を提案、満場一致で採択された。またロバートソン嬢も名誉書記の元で作業ができるのは午前中だけであった。午後にロンドン中央郵便局（General Post Office）の仕事があったためである。

SSDの仕事はサウス・ダウンズの保全に限らなかった。サセックスから疎開した人々からサウス・ダウンズの写真が欲しいという多くの手紙がSSDに寄せられた。もし報告書から会員名簿を省略してサイズを小さくすればコストは当初見込みの半分になるので、年次報告書をもっと小さなサイズで印刷することが決定された。写真が喜ばれるので入れることになっ

た。写真は借りものでよく、SSDにとってはコストがかからないことが報告の中で強調されることになった。

1941年8月23日の評議会では、サウス・ダウンズ戦後計画についての提案募集について討論された。アーサー・ベケット会長は、各地区担当者によるダウンズの慎重な調査を推奨する提案を、現時点で可能な限りという条件付きで行った。会長はまた、この仕事の完成に当たっては全国規模の諸協会の協力を仰ぎ、いかなる行動方針をとるかを決定することを意図することも提案した。

F・デリマンが続き、過去に起きたことと戦後間違いなく起きるであろうことについて述べ、ダウンランドはブライトンにおいては海から1マイルに満たないことから、特別な禁止立法によってダウンランドに建売業者が無秩序に勢力を広げるのを防止する必要があると述べた。彼はすべての町区(township, 教区を分割したもの)の周囲5マイルに緑地帯を設けることを促し、徹底抗戦ではなく防衛的な行動をSSDとその他の団体が個別もしくは集団で取ることによって政府の見解を固めさせて、必要な中央での法制化を求め、世論を啓蒙することを強く促した。

リッチモンド・ウィーラー博士はこれらの意見に同意すると共に、個人の意見として、町区の制限と政府による自治領その他への移民の推奨こそが開発の拡大によるさらなる自然破壊を阻止するための部分的な解決をもたらすだろうと述べた。

C・E・クックは欠席だったが提案を短い書簡の形で届け、その中でたとえばダウンランド地域および隣接する沿岸におけるいかなる計画も統括する権限を持つような部局が設置されるべきであると述べた。経験的に地元計画当局(Local Planning Authorities)は都市計画には適さない、なぜならあのような小さく分割された部局では当然ながら地元の利害に左右されてしまうからだ。

討論の結果、5人からなる小委員会の結成が提案された。同委員会は地区担当者に提出するアンケートを起草し、地区担当者がそれに応じて行動して自分の地区を上記で示されたように調査する。この提案は全会一致で採択され、以下の者が小委員会を構成することになった。

アーヴァイン・ベイトリー大佐（小委員会委員長に選出)、リッチモンド・ウィーラー博士、アーヴァイン・ベイトリー夫人、F・デリマン、F・ペパー、A・H・クルック。

SSDの戦時本部（サセックス州ベリーのリヴァー・ビュー・コテージ）が軍当局もしくは宿舎割り当て当局から徴発されるおそれがある件について、名誉書記は大量の通信を報告した。このどちらの当局も会長や彼女自身を「脅迫」することに失敗し、この件に関する最終決定を彼女がちょうど陸軍省からじかに入手し、コテージにはもはや脅威がないことを評議会に報告できることをうれしく思うという発言があった。

名誉書記はまた、SSD使用分のガソリンの追加放出について鉱業省と長期にわたって交わした通信についても報告した。ガソリンが必要とされる正確な目的についての度重なる詳細な説明にもかかわらず、この要請は拒絶された。この件は今やT・P・H・ビーミッシュ海軍大将の意見と、可能ならば助力に委ねられている。

1941年4月26日の年次総会は、報道の代表者が同席する中で行われた。会長が短い演説を行い、SSDが会員数の不可避の減少にも関わらず存続できたことに満足の意を表明した。多くの会員が状況が良くなれば再加入する約束をしてくれたことは心強いことであり、現在会員数は900にとどまっているものの、これは近年の数字より100ほど少ないだけであり、このことは名誉書記であるアーヴァイン・ベイトリー夫人によっていまもなお為されている素晴らしい仕事に対する大いなる賞賛であると述べた。

会長はまた、ダウンランド・パトロールはその活動を継続中であり、SSDの戦後の記録のために目下メモを集積し、貴重なデータを収集しているところであると述べた。会長は最後に、「戦争の終結が建売業者その他の自然美の簒奪者による搾取の終焉になることを願い、またダウンズが自然によって本来意図されているであろう目的、すなわち農業の発展と人々の娯楽という目的に帰ることを願う」と述べて演説を締めくくっている。

つぎに治安判事のアーヴァイン・ベイトリー大佐（評議会の議長）が公共通行権道(public right-of-way)、フットパス(footpath)、乗馬道(bridlepath)の耕作問題に会員の注目を求めた。この耕作はいまや広範囲に行われていた。かつてはこれらの道を農家や地主が耕作することは違法であったのだが、いまでは可能である。しかしその場合でも耕作の予告をする必要があるし、また義務づけられている。また掲示を出すことが求められ、その中で代替路を指示し、作物を育成している場所を表示しなければならない。そのような予告がなかったり、代替路が指示されていなかった場合はすべてSSDに即刻知らせて欲しいとベイトリー大佐は会員に要請

した。

まとめ

この時期の大きな出来事は、やはり第二次世界大戦の勃発である。これはSSDの活動の様々な面に大きな影響を及ぼした。疎開により会員数は減少し、軍による土地の接収や農家の耕作によりダウンランド・パトロールなどの保全活動も制限された。本部も移転を余儀なくされ、移転先も軍による徴発の危機に瀕した。また事務作業も女性の徴用により支障が生じたことが史料から窺える。都市計画や建設計画への対応も戦時中とあって思うに任せず、戦争終結後に多くの課題は先送りされた。

しかし、そのような状況の中で、SSDの会員たちは戦争の終結を信じ、その後を見越した行動方針を立てるべく努めた。その情熱を支えたのは、アーサー・ベケット会長の演説にもあったように、戦争の結果がどうなろうともサウス・ダウンズは永遠であると言う信念であった。

注

1. Peter Brandon, *The South Downs* (Chichester, 1998), xv.
2. 本稿の史料は英国イースト・サセックス州古文書館（East Sussex Record Office）所蔵の「サセックス・ダウンズメン協会運営委員会議事録（The Minutes of the Executive Committee of the Society of Sussex Downsmen）」およびそれに添付された書簡や文書である（整理番号ACC6849）。なお、SSDは現在では「サウス・ダウンズ協会(South Downs Society)」という名称になっている。
3. Angus Calder, *The People's War* (London, 1969), 121. 道標は都市区域では1942年の秋まで、農村地帯では1943年中頃まで再登場しなかったという。